第３回高知県産業振興計画フォローアップ委員会の概要

日　時：平成２２年３月２３ 日（火） 13:30～16:30
場　所：高知サンライズホテル「向陽」
出席者：別紙のとおり
事務局：知事、副知事、産業振興推進部長、理事（交通運輸政策担当）、総務部副部長、商工労働部長、観光振興部長、農業振興部長、林業振興・環境部長、水産振興部長、公営企業局長、各地域産業振興監　ほか

１　開会

２　委員紹介

３　知事あいさつ

本日は大変ご多用の中、この高知県産業振興計画フォローアップ委員会にご出席をたまわりまして、本当にありがとうございます。

実行元年も残すところあとわずかとなりました。この間、さまざまな形で産業振興計画を実行してきたところでございますけれども、その実行過程で得たさまざまなご意見、ご提言、ご批判、これらを踏まえまして、この産業振興計画、いよいよ来年度に向けたバージョンアップ、産業振興計画バージョン２に向けて新しい歩みを踏み出していくべきときが来たと考えさせていただいているところでございます。

前回のフォローアップ委員会におきましては、成長戦略を中心に現在までの進捗状況を見ていただき、そしてご審議をいただき、新しい改定の方向について一定の方向観のお示しをいたしたところでございますが、本日のこのフォローアップ委員会におきましては、地域アクションプランの関係を特に中心としてお話をさせていただき、現在までのこの１年間の取組状況、新年度に向けてどういうことをしようとしているかということについて、我々の原案をお示しさせていただいて、ご審議をたまわりたいと考えておるところです。

また、来年度におきましても、この産業振興計画、不断の PDCA サイクルを回していくことで改善を図っていかなければなりません。それをどのようなやり方でやっていくかということについても、またご審議をたまわれれば幸いだと思っているところでございます。幸い「土佐・龍馬であい博」、昨日までにメイン会場が 10 万人、そして四つのサテライト会場を合わせまして 15 万人近くのお客さんに来ていただき、そして「とさてらす」の方につきましてはもう既に 23 万人お客さんが来ていただいている状況で、当初の想定を大幅に超える形でお客さんが来てくださるようになりました。しかし、こちらもまだまだ課題はあります。もっともっと地域へ、県外のお客さんに入っていただきたい。

そしてもう一つは、何よりも今の熱狂に単に浮かされることなく、クールな視点でポスト「龍馬伝」に向けた取り組みについても既に始めていなければならないなど、課題があるわけでございます。ただ、何と言いましてもおかげを持ちまして、この龍馬ブーム、高知ブームのおかげでいろいろな形で

追い風が吹いてきておるところだと思っております。テレビを見ましても、今朝も高知特集をやっておりましたし、昨日もやっていたという状況で進んでいます。嬉しいことに、桜も今年は日本で一番に咲いてくれました。あっちこっちで高知の桜が開花したということも放映もしてくれるようになって、桜も応援してくれているかと思って私は嬉しかったわけでございますが、いろいろな追い風が吹き、おかげで特に外商活動については、これも当初の想定を超えた形で仕事が進み始めたかなと思っておるところでございます。

ただ、油断をしてはいけません。この追い風が吹いているときに、追い風がなくなった凪の時代になったときのことを常に思いを描いて、今の段階で少しでも前に進んでおって、自立して進んでいけるよう、挑戦の視点でもって努力を重ねていかなければならないと考えております。

産業振興計画の改定そのものがポスト「龍馬伝」にも備えた、自立していける挑戦の年に向けた新しい改定ということになると考えております。先日、県議会でも予算をお認めいただきました。本日、この産業振興計画のバージョン２に向けての改定についてご審議をいただき、そして新しい歩みを進めることができればと考えておるところでございます。

長丁場になりますけれども、本日のご審議、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

議事　４

（１） 地域アクションプランの成果と今後の展開について

① H21 の取り組み等の総括説明

《＊参考資料２により、産業振興推進部長からを説明》

② －１　地域ごとの取り組みの成果等の説明

《＊資料１により、安芸、物部川、高知市の各地域産業振興監から説明》

※　意見交換の概要は次のとおり

【副委員長】

・観光について、少し補足したい。先ほどご紹介いただいたように、観光は顕著の成果が出ていて、上町にある「龍馬の生まれたまち記念館」の入館者が対前年同月比で大体５倍近くなっている。ここに来られるのは元々ほとんどが県外の方々なので、周辺の旅館・ホテル、それから市内の旅館・ホテルからもかなり送り込みがあり、非常に好調に推移している。

・「龍馬の生まれたまち歩き」は、上町を中心とした有料ガイド付のまち歩き。よく「長崎のさるく」のまち歩きと比較をされるが、今後さらに充実をさせていかなければならない。「長崎のさるく」は、今、毎年毎年ずっとコースが追加されているので、おそらく今 100 コース近くあるのではないかと思うが、「長崎のさるく」もガイド付で回っていくもの、それから１人で地図をもとに回っていくものの２種類ある。どちらかというと、地図をもとに少人数で回っていくというパターンが多いが、高知市の場合もこの６コースはすべて有料ガイド付のコースなので、ガイドなしで回れるというコースもさらに磨いていき、つくりあげていかなければならないと思っている。

【A 委員】

・私の自宅は「龍馬の生まれたまち記念館」の近くであり、入り込みがすごく多いことを感じるが、

駐車場が問題だ。いつも整理の方から「すいません、満杯です。」という言葉ばかりを聞くが何とか解消する方法がないか。

・龍馬の生誕地のある電車通りも多いときは 20、30 人連なって記念写真を撮っているけれども、あれは少し寂しい感じがする。ぜひその駐車場の充実を何らかの方法で対応していただくとより観光客が多くなると思うので、よろしくお願いしたい。

・例えば民間の駐車場が近くにあるが、そこを借りるとか、もしくは少し離れたところからの横持ちができないか。何かそういうようなことを考えていただくと、なお一層皆さんにとってはプラスになるのではないか。

【副委員長】

・上町の「龍馬の生まれたまち記念館」は、私が観光課長のときにつくった施設で、もともと駐車場対策をしなければならないと思っていたが、これだけ入るとはちょっと予想していなかった。今の入り込みだと、民間からの借り上げということ含めて考えていかなければならない。早急に適地を探してみるようにしたい。

【B 委員】

・確かに「龍馬伝」の効果というのは非常によく表れていて、非常に嬉しく思う。例えば他県、愛媛県とかあるいは九州地区とかも同じような効果が出ていると思うが、他県での効果との比較、分析はしているのか。

【知事】

・長崎と特に比較をしている。例えば高知県と長崎で、同じようなパビリオンを長崎が１月初旬から、本県は１月 16 日からオープンしているが、累計の入場者数では本県の方が多い。３月中旬で比較すると、長崎が 12 万 3,000 人に対して、本県が 12 万 6,000、7,000 人ぐらいだったと思う。

・ある旅行会社からいただいた「今後の伸び率の推移」のデータをみると、長崎が対前年で大体 20%ぐらい伸びるという予想に対して、本県は月にもよるが 200%となっており、明らかに伸び率は本県の方が大きい。そういう動向かなと思っている。

・この場だから特に謙虚にということもあるが、発射台は向こうが高いのかなと思っている。一方、アップトレンド（大きな流れ）は本県の方がずっと上だと思う。伸び率は圧倒的に本県の方が上だと思うが、長崎は発射台が高い。やっぱり「さるく博」の伝統。例えば、まち歩きのコースにいろいろ魅力的なシステムがあって、かつ回っていく先々で休憩したり、食事をしたりするシステムなんかも自然と組まれてきていて、それが確立されていて、さらに「さるく博」の時にやり始めたことをずっと続けて磨き上げている。

・本県は逆にこういうまち歩きコースを今始めているから、そういう意味においては、発射台は向こうの方がずっと高い。学ぶべき点は多い。逆に言うと、彼らがああいう形で「さるく博」を契機に発展していったように、私たちもこの「龍馬博」を契機として発展をしていって、先々につないでいくような観光地づくりにつなげていかないといけない。まさに他県との比較を視点にする、視野を持てというご指摘だと思うので、その視野を持ってやっていきたい。

【委員長】

・観光も、他の分野も数値が伸びているということは結構なことだが、全国的に見たときに本県のポジションはどういうレベルにあるのか。例えば、さっきGAPとか天敵の導入率が高いということで説明をいただいたけれども、そういうところも相対比較がぜひほしい。

【知事】

・そういう視点を持ってやっていきたい。ちなみに、天敵の導入率は圧倒的に高知県が一番高い。

【C委員】

・先日、１日１便の東部観光バスに乗ってきた。本当に素晴らしいDVDと「東方見聞録」ができてありがたい。東部の広域のネットワーク化も、あれを見ていると進んでくるなという実感があって、本当に嬉しく思った。その中で２点ほど大事な視点を感じた。
・一つは、土産品、物産の販売の仕方。随所にそういう場所があるけれども、販売の仕方がいまだに少し下手だなと思う。高知市にできた「てんこす」ぐらいの品揃えや、品質のレベル、ボリューム感、そういうものがあると買いたいなという気になるが、残念ながらそれだけの質感やボリューム感が点在している場所では少ない。できるだけ１次産品なんかも活用して、その土地ならではというものを感じさせるものを揃えるよう、さらに工夫をしていただけたらと思う。
・もう一つは、ボランティアガイド。ボランティアガイドに案内をしていただいたけれども、田舎に対する自信がまだちょっと弱い。ご自分たちの日常生活は田舎だと思っておられて、都会の方をそんなに満足させるものでないという思いが随所に匂ってくる。安芸の野良時計から土居廓中を回るときに、私は「これは一級品だということをなぜ説明しないのか」と言ってしまった。あの弘田龍太郎の歌碑のところも「あまり皆さん方はご存じないかも分かりません」、「『叱られて』なんていう曲はほとんどご存じないかもわかりません」という説明だったので、「いやあ、私らのときの小学校の教科書に出ていた曲だ」、「これを知らなければ、日本人じゃないというぐらい言ってくれ」と言ったわけだが、やっぱりそういう点がどうも弱い。ぜひボランティアの皆さん方にさらに自信を持っていただくような方策を、後押しいただきたい。

【D委員】

・本当に短期間の間に地域アクションプランの具体的な項目がたくさん出てきて、その中にも具体的な数値目標が出ている。それに対する成果と課題も出てきており、今、春の種まきの時期だと思うが、たくさんの種をまいて、それが少しずつ実っていき、それが地域でやっている皆さんの自信につながっていけば良いなという気がした。
・その中で、二期作文化だとか、学校給食で地産地消・食育の推進だとかいう項目があったが、非常に素晴らしいことだ。食料の自給率の問題等もあるし、学校給食の関係で食育を中心にして、ぜひこういった地産地消を学校レベルで考えて、地場の商品、野菜、果物、生鮮品などから子どもの好きな加工品を開発して広めていく。それが、この１地域の学校で終わることなく、成功事例があればそれを全県下に広げていく。それを冷凍加工すれば、それが全国の給食に広がるというふうな広がりの輪が期待できるのではないか。
・この二期作文化をもっと広めていこうという動き。昔から土佐では米が２回取れるわけで、一期で終わるというのではなくて、二期でつくったものを飼料に使うという発想は非常に素晴らしい。ほ

とんど家畜の餌は、海外からの輸入に依存しているわけで、こういった気候風土を生かして、それを飼料に使って、技術開発されて、それが広がるということになると、これも全国的な広がりの絵が描けるのではないか。

・このようなまいた種が実って、成功することによってその地域に活力が生まれ、この地域のアクションプランが地域で終わることなく、良い事例は全県下的に広がり、それが全国に広がるというふうな発想でぜひ取り組んでいただきたい。

【知事】

・ごもっともなお話だと思う。地域アクションプランのその成功例をいかに全県下に広げていくかということで、いろいろやり方はあろうかと思う。例えば成長戦略の方にしっかり反映させていくということもあるだろうし、他の地域にご紹介をするということも良いかと思う。

・後でご説明を申し上げるが、４月以降、改定内容を住民の皆さんに説明していかなければならないと思っている。ぜひ成功事例などを紹介するシンポジウムの開催も考えているので、その中で今ご指摘いただいたようなものをぜひ紹介していきたい。

（２） 地域アクションプランの成果と今後の展開について

②－２　◆ 地域ごとの取り組みの成果等の説明

《＊資料１により、嶺北、仁淀川、高幡、幡多の各地域産業振興監から説明》

※　意見交換の概要は次のとおり

【E 委員】

・先ほど出たご意見と重複する点も多いと思うが、前回は分野ごとの話、今日は地域ごとの話ということだったので、これは先ほど知事のお話にもあったとおり整理するとマトリックスになる。それをよく見ていくとおそらく地域ごと分野ごとで色の濃いところと薄いところが出てくるはず。全部が同じ色になる必要があるとは思っておらず、色に差があるのが地域の特色だと思うので、それはそれで構わないけれども、それをマトリックスで整理することによって、地域の中での力の入れどころというか、資源配分の問題、これを明確にすることができる。もうすでにやっておられると思いつつあえて申し上げるが、ぜひやっていただきたい。その中で色が濃いところ、その中でも特にうまくいっているもの、成功事例を称揚していくというのは非常に大切なこと。その成功事例がなぜうまく進んでいるのか、一方では必ずしもうまく進んでないものもきっとあるはずで、なぜ一方はうまく進み、一方はうまく進まないのかとこういったところをある程度クールに見ていく必要がある。だから、それをやる意味でもマトリックスで整理することが非常に重要。

・もう一つ申し上げると、この７つの地域の一つひとつの地域の中にもおそらく整理すると進んでる地域と進んでない地域があるはず。これも全てが同じ色にならなくても良いし、ならない理由があるはずなので、力を入れているにも拘わらず進まない地域がもしあるとするならば、それは別の理由を探す必要がある。そういった意味では、まず一つのプロジェクトに対して全力を傾注して成果を出すということが非常に大事だということは間違いないし、地域産業振興監の皆さんそれぞれで努力をなさっておられると思うが、産業振興推進部の仕事かもしれないけれども、そこから一歩引

いて冷静に状況を見て、それを他所に生かす、これが非常に大事なんじゃないか、数が多いだけにそれはかなり有効な手段になるのではないか。

【産業振興推進部長】

・E 委員がおっしゃられるように７つの地域は、スタート時点でもそれぞれ違う面があって、色で言うと薄い濃いがあった。そうした中で先ほど D 委員からもご指摘あったけれど、他の地域でうまくいっている事例を見て、自分たちの地域でこういう取り組みができないかということを見ていき、理想としては、全部が濃い色になっていくような形で取り組んでいきたい。
・成功事例と失敗事例がある。我々もいろいろな方々の意見を聞く中で、こういう取り組みが少し足りないのではということも参考にさせていただいている。そういう意味で来年度、先ほど、知事も申し上げたけれど、実際に取り組まれた方が今年は相当いらっしゃるので、その地域の方々に別の地域で「こういう取り組み方をした」、「これでうまくいきました」、「こういう取り組み方をしたんだけれどもこういう課題がありました」ということを５、６月ぐらいから地域を回っていく中でお話しいただくなど、各地域の連携について、事例を勉強しながら少しずつ全体をランクアップさせていきたい。

【F 委員】

・関連した同じような話になるが、例えば私ども園芸農業の分野で言うと、それぞれの地域でいろいろな活性化に取り組まれているし、地域産業振興監の皆さんもご苦労をされて、こういった成果になっているし、それはそれで非常に大切なことだと思う。
・ただ、今もお話があったように、県全体の産業振興とその地域の振興とをどう結ぶのか。例えば地域でそれぞれの取り組みが立ち上がった場合、県域で見た場合は品目間の問題とか地域間の問題、これを県全体の産業として県益にどう結びつけていくのかと言うのが、私どもの一つの分野での団体の役割でもあるし、県の役目でもあろうかと思う。
・そのあたりをこれから十分に詰めていかれることが必要。例えば外商という一つの分野のことで、前回のこの委員会でもお話させていただいたが、いろいろなアクション起こして外商をやっていくということも大事だが、一方では今までの流通ルート、仕組みもあるわけであり、それに固執するものではないけれども、そういったものとの組み合わせ方も非常に大事になってくるのではないか。
・それぞれの地域の貴重な計画が、今もご意見があったように、県全体の計画とうまく組み合わされるように期待をしたいと思うし、我々も気をつけてやっていかなくてはならないと思っている。

【知事】

・確かに今日のご説明はまだちょっとグロスの説明になっている。片方は伸びているが、もしかしたらどこかで何かが押しのけられていて、片方が下がっていてネットで見ればプラスマイナスどちらにいっているのか分からないということも出てくるかもしれない。
・ただ今回のアクションプランでは、それぞれのブロックの中で一定調整を経た上で出てきているものなので、おそらく押しのけてというようなことはまずないのではないか。これから取り組みがそれぞれ大きくなればなるほど、その視点というのはネットで見るというか、より全体から俯瞰すると言うか、そういう視点というのは極めて重要になってくる。
・だから、先ほどご指摘いただいた、マトリックスで分析するというようなことをぜひやっていかな

ければならないが、もう一つはそれが故に、余計に産業成長戦略で横串を通してやっていくということで、高度成長戦略は極めて重要になってくる。地域アクションプランは基本的に産業成長戦略とは矛盾をしていないので、産業成長戦略の進捗状況を数値的にも管理していく過程で、地域アクションプランがどう効いてきたかということを位置づけていくという形で管理をしていくのが必要になってくると思う。それは、多分、これから１年動いてきたその後のことになる。来年はもう一段高度な管理というのが必要になってくる。そういう点に注意しながらやっていきたいと思う。

【委員長】

・来年度の地域アクションプランの件数が 238 で、どんどん数が増えているという地域もあり、全てが進捗していくと、全体をいかに俯瞰し今までは部分最適だけを追求していた局面もあったかと思うが、全体最適を考えつつ、しかも部分最適も考えるというようなトータルに考える視点が重要になってくる。
・そういう意味で産業振興推進部を中心とした、横串を刺していただいている県の部局の出番というか、役割の重要さというのが増してくる。さらに言うと、Ｆ委員からコメントいただいたとおり、このフォローアップ委員会の委員そのものが、この場を離れると各組織の責任者であり、一番それを現場でご覧になられているというお立場である。だからここからフォローアップ委員会のメンバーも一緒に機能していくということが、さらに求められているのはないかと強く感じた。
・来年度の PDCA を回していく上で、さきほどのＥ委員のご意見も参考にさせいただきながら複雑さは増してくるけれども、知恵を出していきたい。

【G 委員】

・７ブロックの中で安芸地域と物部川地域、嶺北地域の３地域にユズの加工が計画されているわけだが、それぞれ地域で、ユズを搾汁した濃度が違ってくるのではないか。しかし、さきほどＦ委員が言われたように、地域にこだわらないと、県域の中でユズの製品を考えた場合、果たしてユズの濃度の関係がどうなるのか。
・仁淀川でわさびの栽培が計画されて、現在 49 戸でなされおり、今後の計画の中では 110 戸がやっていくということだが、年間通じて１戸あたりどのくらいの所得があるのか。
・幡多地域のシイラの加工とか清水のサバ、宿毛のイワシについて説明があったが、シイラは、昔、猫またぎというほどすぐに鮮度が悪くなって安くなる魚であったので、やっと陽のあたるような場に出てきたと感じている。少し心配なのが、清水と宿毛で加工場が計画されており、既に稼働しているところもあるなど、高齢化の中で、若い方たちの働く場ができるというのは大変結構なことだが、この加工場をつくる中で、年間を通じて魚類をどのくらい確保できるものか。加工場ができれば年間事業管理費の中で施設費や人件費が必要になる。現在、メジカなどは獲れているが、足摺ではすごく不漁の時もあったし、漁の悪い時にどういうふうに漁獲を確保していくのか。

【農業振興部長】

・ユズの加工については、ご指摘のように地域によって、若干風味とか成分が違うという指摘はいただいているけれども、それを成分分析的にきちんと整理していない。工業技術センターの方では、かなり詳しくやっているようだ。
・これからユズが中山間地域で増産をされる傾向の中で、県下でユズの生産を統一的にまとめて、有

利販売につなげていこうということで、ユズの販売推進協議会という組織を中心に準備を進めている。一つにできれば、全国の半分近いシェアを持っている高知県なので、その成分を統一して全国スタンダードにもっていくような取り組みにも力を入れていきたい。

【D 委員】

・私も専門的に風味がどうかという数値的なものは持っていないし、高知のユズと徳島のユズとで風味がどんなに違うとか、韓国産のユズを混ぜた場合にどうなるかもわからない。お酒でもブレンドをしながら品質を保つという方法がある。わが社の商品では土佐山産という銘柄を謳っているから、100%の必要性はないけれども、ある程度のウエイトをそれに置かなくてはならない。
・例えばミツカンとか、キューピー醸造とか、専門のところはそういった分析のノウハウを全部持っている。ただ、土佐のユズは、非常が評価は高いことも事実であるし、全国のウエイトの大半を持っているということだから、裏年表年があるので、去年は採れているけれども、冷凍保存することによってそれを調整しながら来年も使える。大事なのは、ユズは京都の文化で西に強いく東が弱いわけだから、もっともっと東の方に販路を広げるとか、商品開発のやり方というのはいろいろあるのではないが。
・いろいろな地域の話がたくさん出ていたけれども、そういった地域の人と民間をどうつなげていくのか。技術開発によってはいろいろな工業分野の方とか、産学連携で、学との連携だとかが必要になってくる。聞いた中では、地産地消でいきながら拡大していくというやり方と、地産外商で外へ出て他で競争していけるというふうな商品もある。すでにわが社の現場レベルでも話し合いがなされていて、プライベートブランドでやろうとか、そこのブランドをやめてわが社のチャネルでいこうだとか、他のチャネルを使いながらもっともっと拡大していこうだとか、具体的な話も出ている。いろいろなステップ・バイ・ステップのやり方があろうか思うが、動きの中に民間との話し合いの接点がどんどん進んでいるのではないか。

【知事】

・１点だけ。先ほど私は象的な言い方をしたけれど、グロスとネットで把握しないといけない。そのためには全体像を把握しないといけない。その際に必要なのは産業成長戦略なので、しっかり把握することだと申し上げたが、もっと端的に言えば、成長戦略の県庁内での責任者はそれぞれの部の部長である。それぞれの部長が、地域アクションプランの動きをしっかり把握しているということが重要。基本的には把握しているわけだが、今後、今まで単にペーパー上だったものが、物になってくるので、そういう意味においては、より把握の度合いを高めていかないといけない。地域産業振興監と各部との連携というのが非常に重要になってくる。
・そんな中で、ネットで落ち込んでいるということにならないように、グロスでプラスのものはネットでもプラスになっているという形を確保していくように運用していく。産業成長戦略もそうであるし、例えば、流通戦略なども全体をみながらやっていくということである。

【委員長】

・少し専門的な立場でコメントさせていただく。一つ目の質問のユズの搾汁というのは、装置的に定量的な評価ができる。もう一つは定性的な意味で、他の搾汁液と差別化していくこともできるので、アクションプラン全体で４ブロックのユズをうまくリンクさせながら、強みに変えていくことと、

最終的に高知県のまとまりという意味では、ユズをいかに域外に売っていくか。これは産地間競争ということになるので、産地としての強みをより際立たせるような分析データも必要であるし、今後、売れれば売れるほど産地偽装とかの問題も出てくるので、そういうものに対する備えも含めてやっていかないといけない。

【仁淀川地域産業振興監】

・わさび自体は、現在１ｔあたり大体 20 万円で取引されている。現在の加工量の 80ｔを 49 戸の農家で栽培しているが、これだけで専業で食べていくということにはなっていない。ただ、苗を植えて３、４ヶ月、露地で栽培するというパターンを取るので、収入を得るには良い植物であり、栽培面積が増えている。今後、目標とする１５０ｔまでは、加工会社が十分に買い入れが可能とのことなので、栽培面積は伸びてくると考えている。

【水産振興部長】

・漁獲量と年間の供給量の件について。県下では、室戸と宿毛が代表的な漁獲量の多い地域で、種類も多い。今回の加工場の整備も室戸と宿毛であり、地域の特性に合ったものになっている。加工で最も大事なのは、魚が獲れなくなった時に何をやるのか。年間を通じて稼働していかなければならないので、養殖業というのが大事になってくる。だから、宿毛においては養殖場もやっていく。室戸の方もメインのシメサバだけではなくて、今後は他で揚がる魚もできないかということで、年間を通じて供給量を一定にし、一定の価格で仕入れるようにする仕組みを一生懸命模索しているところである。

【H 委員】

・県民運動という形で大々的に展開しているということは、全国的にみても非常に新鮮なこと。皆さんは当事者でいらっしゃるけれど、少し客観的にみると、県民運動として産業振興しているということ自体に、すごく価値がある。
・特に政権交代して今の政権になって、マクロ経済戦略がないという言われ方をすると非常に反応されるけれど、反応するのはないからだ。小泉政権の時に格差というとすごく反応されたけれど、それはそこがうまくいかないからだ。今の政権はマクロ経済戦略がないけれども、どうしたら良いかというと、いわゆるマクロ経済政策をしてもどうも何かピンとこない。結局、高知県でやっているようなことを皆でやらないといけないのではないかということかもしれない。私はこの県民運動が成果を挙げるためには、もちろん今日議論になったようなコンテンツ、中身があるということも大事であり、なければ話にならないけれど、中身があるだけでは多分駄目で、高知県がやっていることが現在の日本の右肩下がりの経済の中で唯一ふさわしい政策だと思う。つまり、この時代の最もあるべきモデルだというふうに評価されることが大切。端的に言うと、日経新聞の左上の特集に「高知」と出ないと駄目。もちろん高知新聞にも出る必要があるけれど、高知新聞だけでは多分駄目。これは私の役割だと思うけれど、高知がやっていることが素晴らしいということを情報発信して、それが全国的に発信されることで高知県民が非常に誇りや自信を持つ。
・その時にヒントになるのが、緑の分権改革のような動き。緑の分権改革は国民運動だけれど、そこに高知というのはもうやっているよ、先にやっているよというふうに載せていかないといけないし、いわゆる一括交付金とか義務付け基準付けの見直しなどの話も、これをやるためには一括交付金が

いるのだとか、これをやるためには義務づけ基準付けの見直しがいるのだというふうにすると、政権としても受けやすくなる。そこを私もお手伝いしたい。

【I 委員】
・ここ一年あまり、1.5 次産業の推進や地産外商ということで強力に取り組んでこられて、かつ「龍馬伝」効果もあって目に見えて加工品のバリエーションとかが増えてきたというふうに思うけれども、ほんの１年半、２年前くらいまで、例えば、県内でレトルト加工するラインがないとか、米粉のラインがないとか、ゼリーにするのでもピューレ加工するようなところが弱くて、そのプロセスが県外の事業者に出ていたというようなところがあったと思うが、この１、２年で目に見えて改善されてきたとか、そういったところを教えていただきたい。

【委員長】
・食品加工における機会損失というところでは、レトルト・米粉・ピューレがある。食品産業研究会の中にレトルトを導入する企業がいるが、自社製品だけでなく、他の食材提供メーカーからのレトルトによる加工も引き受けになられているということを研究会で発表されていた。

【産業振興推進部長】
・今、委員長がおっしゃられたような状況。食品加工の皆さん方と勉強会をしており、食品加工の皆さん方からアイデアをいろいろ出していただいているし、衛生管理への取り組みの問い合わせだとか、そういうものが非常に多くなってきている。
・良い物をつくっているというような中でパッケージ一つで売り上げも全然違ってきたというようなお声もいただいており、全体的にそれぞれの業者の方が非常に積極的になってきているということを、我々としては嬉しく思っている。

【知事】
・工程ごとに何が抜けているのかというのは把握している。そこらあたりを把握してみると「ものづくりの地産地消」をやっていくときに、より具体的に戦術的にアプローチできると思う。

【委員長】
・私も食品研究会のリーダーという立場なので、今のご質問に関してレトルトでお答えしたけれども、そういった機会損失が徐々になくなってきているという状況であることは申し添えておきたい

⑵ 産業振興計画の改定について

◆ 計画改定案について、産業振興推進部長が資料２の１により説明

※ 意見交換の概要は次のとおり

【委員長】
・バージョン２でかなりボリュームも増えている。当初の計画も概略版を作られていたが、例えばバ

ージョン２になった際に、より県民目線で見た時に、この膨大な資料や計画書を細部まで見るというのはなかなか難しいと思う。例えば改定のポイント、目玉を分かりやすく伝えることを何かお考えか。

【産業振興推進部長】
・本年度、広報のために概略（ＰＲ）版を作成した。今回も、改定の内容を分かりやすい内容にまとめ、年度初めに作ってお示ししたい。

⑶ 平成 22 年度の進め方等について
（資料３により、計画推進課長が説明）

※　意見交換の概要は次のとおり

【E 委員】
・先ほども出たけれど、このシンポジウムで取組事例を発表するというのは、非常に意義深いことだ。先ほど私が申し上げたようなことにも有効だろうし、取り組んでいらっしゃる皆様方を称揚するというか、表彰するというのはもう少し先になるかもしれないが、誉め称えるといったことは、非常に勇気を与えることになると思うので、ぜひやっていただきたい。
・広報の手段の中で、マスメディアが出てくる。もうすでにやっていて、ここにたまたま載っていないだけなのかもしれないが、ケーブルテレビも非常に良いと思う。シンポジウムなどを録画して何度も何度も流すというのは、ケーブルテレビが得意。四国はケーブルテレビの加入率が割と高いということもあり、地元の人に地元の人が何をやっているかを知ってもらうメディアとしては結構有効だと思う。ケーブルテレビ会社にとっても、コンテンツをもらうことになるので、もしやられていないのであれば、検討される価値があるのではないか。

【知事】
・あまねく広く、いろいろな方に取り組みを知っていただくことをやっていきながら、特に深く、ディープに関わっていただく方々には深く理解をしていただくという、いわばＴ字型の戦略をとっていくことが重要なのかなと思っている。
・そういう意味において、それぞれのメディアの特性があると思っている。例えば、「さんＳＵＮ高知」は、１カ月に１回、情報量は少ないけれど、全世帯に配られるという良さがある。他方でホームページの「政策トピックス」は詳しく書けて、かつ、随時更新できるから、ディープに知っていただくには良い手段。だからそれぞれにメディアの特性を生かしながら、Ｔの形にしていくような広報をしていくことなのかなと思っている。
・来年度は、シンポジウムを開催し、できればここで多くの人の新しいやる気に火を点けたい。火が点いた方が、いきなり地域アクションプランといっても大変だと思う。そこで、例えば、ワークショップや集合研修を行う「目指せ！弥太郎 商人塾」を受講していただく。受講していただいて徐々に深く関与していただく。研修やディスカッションをやるので、お互いを深く知れば知るほど深い議論ができてくると思う。深くしていくということについて、従来あまりできてなかったのではな

いかと思うので、今回、深く知っていただくということを強化していく。

【委員長】

・E 委員からもご意見をいただいたように、多分、グッドプラクティクスとかベストプラクティスとかそういったものがどんどん挙がってくるので、それをいかに県全体として評価していき、そして次のモチベーションをさらに高めていただくように活用できるか。２年目ということで、ここのところをぜひお考えいただければと思う。

【知事】

・エリアの特性に応じて、例えばそういうものをあまねく広めていくように来年はコンテンツを工夫するようにしたい。

５　閉会

【知事】

皆様方、本日も活発にご審議を賜りまして、本当にありがとうございました。

また、この１年間を通じまして、このフォローアップ委員会でご審議を賜ってきましたことにお礼を申し上げたいと思います。本日は、お出でになっておられませんが、専門部会、連携テーマ部会の各部会員の皆さま方、地域アクションプランフォローアップ会議において、それぞれの地域でご審議いただいた委員の皆様方にも、この場をお借りいたしまして、心よりお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

お陰をもちまして、産業振興計画バージョン２ということで、一段ステップアップできたのではないかと思っています。本当に多くの皆さんのお声を聞いて、例えば敷居が高すぎるのではないかとか、そういういろいろなご批判の声も聞きながら、今回、改定の内容を詰めてきました。また、アクションプランについても、地域の人たちが本当に血と汗の滲むような努力の中で１歩１歩進んできたものをさらに前に進めていこうという改定でございます。本日までご審議をいただき、産業振興計画を進化した産業振興計画バージョン２として、４月１日より実施をしていく体制が整ったと考えております。来年度は「挑戦の年」でございます。我々執行部といたしましても、ますますの努力を重ねてまいりたいと考えているところでございます。また正式にお願い申し上げることとなろうかと思いますが、来年度におきましても、皆さま方に、この産業振興計画の PDCA プロセスの中でご指導、ご鞭撻をぜひともお願い申し上げたいと思っているところでございます。

本当にこの１年間、ありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。